

短期大学における 「特色ある大学教育支援プログラム」事業の意義

安川 悦子

(福山市立女子短期大学長)

一 はじめに

文部科学省による「特色ある大学教育支援プログラム」事業、いわゆる「特色GP」と呼ばれるプログラムが始まって三年になる。この三年間私は、このプログラムの「実施委員会」の一員として、また審査部会の委員としてこのプログラムの実施の企画と取組の選定にかかわってきた。このプログラムは、これまでの教育支援と異なっており、国立、公立、私立の区別なく、また大学も短期大学も同じ枠組みで、「大学教育の改善に資する」優れた取組を選び出し、「高等教育の活性化」を促すことを目的とするものであ

た。

とりわけ、このプログラムのユニークなところは、大学の規模にかかわらず各大学が申請できるのは一つの取組であるとしたことであつた。十数学部からなり学生総定員が何万人もの超大型の総合大学も、わずか二〇〇人しかない小規模の単科大学や短期大学も、申請できるのは一つの取組であり、同じ枠組みで、同じ基準で、それぞれの教育的取組を競うというところにあつた。この三年間、すこしずつ公募の条件や選定の基準が変化したとはいえ、この基本的枠組みは変わっていない。

このことがどのような意味をもったのか。つまり日本の大学教育にとって「特色ある大学教育支援プログラム」事

業はどのような意味をもち、どのような役割を果たしたか。早計な結論をだすのは危険であるが、この三年間、短期大学部門のテーマ五の部分審査してきた私の立場からみて、また小さな短期大学の長としてこのプログラムの申請にかかわってきた経験からみて、このプログラムが短期大学教育の改善にどのような役割をはたし、どのような意味をもったかを考えてみたい。

二 採択された取組（短期大学部門、二〇〇五年度）とその特徴

このプログラムは、五つのテーマに分けて募集され、それぞれのテーマごとに、短期大学と大学に分けて審査される。それぞれのテーマごとに応募総数の約一〇パーセントが優れた取組として選定され、公表される。

五つのテーマは次のようなものである。テーマ一「主として総合的取組に関するテーマ」、テーマ二「主として教育課程の工夫改善に関するテーマ」、テーマ三「主として教育方法の工夫改善に関するテーマ」、テーマ四「主として学生の学習及び課外活動への支援の工夫改善に関するテ

ーマ」「テーマ五」主として大学と地域・社会との連携の工夫改善に関するテーマ」である。

こうしたテーマのもとに申請された取組は次のような観点から評価される。その取組は、①具体的に設定された教育目標の達成にむけて手段やプロセスが適切であるか、②取組の特性（教育効果をあげるための創意工夫、現代的課題）はどのようなものか、③取組の組織性（大学の構成員がどのように向き合っているか、FD活動や支援体制など）は十分認められるか、④取組の有効性（教育効果を測る方法や工夫）はどうか、⑤取組の将来性、発展性、これまでの実績はどうかなどである。

こうした枠組みと評価のポイントにもとづいて選定された本年度の取組は、短期大学の部に申請された九二の取組のうち一一であった。そのタイトルを簡単な内容をそえてまとめれば表のようになる。

採択された一一の取組を通観してみるとおよそ三つのグループにわけることができる。

第一のグループは、保育士の養成を目的としている短期大学（学科）の四つの取組である。岡山短期大学のように、「オペレッタ」の制作をとおして、保育士にとって重要な

表 2005年度短期大学部門「特色ある大学教育支援プログラム」採択取組

取組名称	内容	短期大学(学科)名	テーマ番号
「人間関係力」養成支援プログラム—学生と教員が協働するオペレッタ制作を通して—	保育士養成における「人間関係力」の育成をはかるために、オペレッタの創作と発表を学生と教員の協働で行うというプログラム。	岡山短期大学(幼児教育学科)	1
フィールド実習をコアとした流域環境教育—健全な水循環系構築に向けたシステム教育—	確かな中堅技術者を養成するために、フィールド実習と関連専門科目を一つにまとめ、健全な水環境についての理解をふかめる流域環境プログラム。	富山県立短期大学(環境システム学科)	2
全人的保育者養成を目指して—「ほいくまつり」という総合表現活動の取組—	保育士養成における子ども理解を深め、コミュニケーション力、コーディネーション力、コラボレーション力を養うために、歌唱、影絵劇、劇を発表し子どもや保護者と集う31年間つづいた「ほいくまつり」のプログラム。	島根県立島根女子短期大学(保育科)	2
利賀村移動授業	保育者になる学生の自主性やコミュニケーション力を育てるための体験的学習としての8日間にわたる宿泊型学習プログラム。	宝仙学園短期大学(保育学科)	2
高齢社会に対応した歯科衛生士の育成—歯科口腔介護教育のカリキュラムへの導入—	歯科衛生士の重要な仕事である「歯科口腔介護」を高齢者・障害者のニーズの観点から整理し、6週間にわたる介護保険施設での実習を取り入れたプログラム。	明倫短期大学(歯科衛生士学科)	2
看護基礎教育における当事者参加授業の実施—主体的・創造的な学習の促進をめざす地域と連携した教育方法の工夫—	看護師の人間力、社会力、学習力を高めるために、看護対象者を専門教育の中に組織的に取り込んだプログラムで、地域社会全体の医療福祉の発展に寄与するプログラム。	山梨県立看護大学短期大学部	3
教育実習記録集「ひろはら」を核にした教員養成の取組	初等教育の教員養成における実習効果をたかめるために、「実習記録」を活用し、教員に必要な資質の育成をはかるプログラム。	千葉経済短期大学(初等教育科)	3
学生の資格取得への総合的支援システム	授業と資格取得の学習を有機的にむすびつけて、短期大学在学生在に「情報・簿記・秘書・英語」などの資格(検定)を取得させる資格取得支援プログラム。	創価女子短期大学	4
地域スポーツ活動支援をとおした指導者育成—スポーツキウジョタイ(救助隊/九女体)—	健康・運動にかかわる指導者の育成をするために、高校へのスポーツ出張指導や体操教室をひらき、体験学習をとおして地域社会との交流を図り、学生への教育効果をあげるプログラム。	九州女子短期大学(体育科)	4
保育者養成における子育て支援・教育モデル—育ち合いのひろば「ほっとステーション親子」—	現代の保育士にもっとも必要な資質だといわれる親や子どもとのコミュニケーション力を養うために、地域の親子と学生の触れ合う場を、大学に開設し、地域の子育て力を高める役割もはたす実践プログラム。	千葉明德短期大学(幼児教育学科)	5
地域と連携した健康支援プロジェクト(静岡県ファルマバレー構想に連携した運動・食育の実践)	地域の先端健康産業集積構想につながる健康支援プロジェクトを、栄養士養成とむすびつけ、大学の地域社会への貢献とともに、学生のコミュニケーション能力や社会性、問題解決能力を養うプログラム。	日本大学短期大学部(食物栄養学科)	5

注：内容については、「特色ある大学教育支援プログラム」実施委員会「平成17年度「特色ある大学教育支援プログラム」採択取組の概要および採択理由」より作成

資質である「人間関係力」の育成をはかる取組、あるいは鳥根県立鳥根女子短期大学のように、「ほいくまつり」の開催をおして保育士の「社会性やコミュニケーション力」「企画力や調整力」を養う取組、宝仙学園短期大学のように、「保育士の「自主性」「問題解決能力」「人と付き合う力」を養い、同時に「あそびの楽しさ」や「自然の認識をふかめる」ために利賀村で八日間にわたる合宿学習を行う取組、千葉明德短期大学のように、学内に地域の親子が集まる「ほっとステーション」をもうけて、日常的に子育て親子に学生が接触できるようにする取組などである。

これらの取組は、それぞれ切り口は異なるが、いずれも、創造的で人間力（コミュニケーション力、コーディネート力、コラボレーション力）をそなえた保育士を育成するための工夫という点で共通している。少子化が進み、社会の子育て力が重要な意味を持つようになる中で、大学や短期大学が地域に根ざした人材養成に應える役割があるとすれば、こうした人間力を備えた保育士の養成は、今もっとも重要な課題であるだろう。

短期大学部門で採択された取組の三分の一強をしめる取組が、保育士養成という具体的実践的課題にかかわるもの

であったことは、この現れである。残念ながら採択されるにいたらなかった他の取組も含めると、短期大学教育におけるこうした傾向がいつそう明確になる。

第二のグループは、次の四つの取組、つまり看護師（山梨県立看護大学短期大学部）や歯科衛生士（明倫短期大学）、あるいは栄養士（日本大学短期大学部）、スポーツ・インストラクター等（九州女子短期大学）の資格を必要とする専門家を養成する学科の取組である。これらの取組は、急速に進む高齢化社会がかかえる問題を反映するものであった。いずれも、高齢者の健康、あるいは介護予防という課題を看護師や歯科衛生士、栄養士、スポーツ・インストラクターの専門教育の中に取り込み、それをおして学生の人間力を高め、同時に地域社会での健康課題に応えようとするものである。

子育て問題や高齢者の健康問題といった、今日、地域社会がかかえる切実で現実的な問題にたいして、短期大学は、人材養成を通じてどのように応えるのか。またそうした人材養成の課程を地域に開放することによって地域社会にどう貢献していくか。これらの取組は、実習科目を手がかりにして地域社会と大学を結び付けて短期大学教育の活性化

を図るという点で、共通していた。

実習科目を短期大学教育の手がかりにするという点では、第三のグループも共通している。富山県立短期大学部の取組は、フィールド実習を手がかりに、川をテーマにしてその流域全体をとらえて環境工学教育のシステム化をはかろうとするプログラムであり、千葉経済大学短期大学部の取組は、教育実習での「実習記録」を手がかりに学生の人間力を高めようとするプログラムである。また創備女子短期大学の取組は、専門教育と結び付けて、学生にさまざまな資格取得のためのプログラムを提供し、あわせて就業意識の向上をはかるプログラムである。

二年間という限られた期間に、どのように専門知識を付与し、職業人としての人的、社会的な力を育成するか。短期大学教育はこのところを工夫し、さまざまな試みを行っていることがわかる。こうした三つのグループの取組をまとめてみると、短期大学教育でいま力点が置かれている、あるいは置かれなければならない点が見えてくる。それは第一に、実習教育を工夫し、専門知識を活かすための幅広い人間力を養うこと、第二に、実習科目をおして短期大学と地域社会との連携を強化し、地域社会のニーズにきめ

細かく応えること、第三に、資格取得を利用して、学生の就業意識（キャリア・デザイン意識）を高めることであつたと見ることができると、

こうした取組が提起する「特色ある大学教育」を、短期大学教育の共有財産として活かしていく。問われているのはこここのところである。

三 短期大学における「特色ある大学教育支援プログラム」事業の意義と効果

採択された取組をモデルに短期大学や大学の教育を改革し、活性化させる。これが「特色ある大学教育支援プログラム」実施委員会が意図した当初の目的であった。採択された模範となる取組を大学界全体で共有する。

これがこの事業のもつ第一の意義であったとすれば、第二の意義は——そしてこの点こそがもっと大きな意味をもつと私は思うのだが——プログラムに応募することをきっかけに大学は自らの教育を省み、再構築し始めたことである。この「特色ある大学教育支援プログラム」は実施の当初から「真摯な教育的努力を続けている」こと、すなわち

過去の実績をふまえることを重要な要件としていた。それぞれの大学（短期大学も含めて）は、これまであまり自覚しないで行ってきた教育的実践を改めて捉えなおし、そのもつ意味を客観的に考えてみる、そうしたきっかけをこの事業は与えたのである。また同時にこの「過去の実績」という要件こそが、この「特色ある大学教育支援プログラム」事業を単なるアイデア競争と申請のプレゼンテーションのうまさや競争を競う事業にしてしまうのを阻止していると思われる。

私の所属する福山市立女子短期大学の改革は、その一つの実例である。この事業への参加（つまり「特色ある大学教育支援プログラム」への申請）を通して、短期大学の教育を全体的に見直すことになった。それは第一に、伝統的に続けられてきた「卒業研究」の教育的意味を改めて問いなおすことから始まった。そもそも四年制大学で伝統的に行われてきた「卒業論文」を真似て作られたもので、学生たちは、「生活学科」に所属するにしろ「保育科」に所属するにしろ、すべてこれを提出しなければ卒業できないというシステムであった。

二年生になると全教員が卒業研究ゼミを分担し、学生た

ちはそれぞれのゼミで、自主的に選んだテーマにしたがつて共同研究をする。卒業研究発表会を開き、卒業研究論文抄録集を出版し、またそれぞれの研究の本論文を製本して図書館に収める。こうしたシステムを三〇年にわたって続けてきた。いささかマンネリ化していた「卒業研究」を、「特色ある大学教育支援プログラム」へ申請することをきっかけにして、改めてその意義を問い直し、短期大学教育の中心に据えた一つの総合的な教育システムとして整備したのである。短期大学教育にたいする総合的なFDが、この申請をきっかけに行われるようになった。

福山市立女子短期大学が、「特色ある大学教育支援プログラム」事業への申請作業をとおしてえた第二の成果は、短期大学が教育目標とする人材像を問い直したことである。家政学を中心とした女子の高等教育機関として創立された福山市立女子短期大学は、保育士や介護福祉士を養成する学科や専攻を持っているとはいえ、この四〇年来「賢い家庭人」の育成を暗黙の了解事項としてきた。かつて女子の高等教育の主流を始めていた家政学（あるいは生活学、生活科学）を中心とする「女子」短期大学は、「良妻賢母教育」をめざした戦前の高等女学校教育の理念を引き継い

だところに成り立っていた。

福山市立女子短期大学もその例外ではなかった。四〇年の間に、時代の流れに応じて、家政学科を生活学科に改め、学生の多様なニーズに応えるために多様な専攻を設けたとはいえ、全体として「賢い家庭人」の人材像は、問われな

いまま短期大学の空気となっていた。

この人材像が、「賢い家庭人」から「人間力のある職業人」へとシフトしたのである。「卒業研究」を軸にして「人間力のある職業人」を養成する。教授会でのこうした議論を踏まえて、カリキュラムの再検討が始まった。そして資格を必要とする専門職業人だけではなく、資格免許にかかわらない一般的な職業人をどのように養成するか。そのための教育を「卒業研究」を軸に、にカリキュラムをどう再編成するか。こうした問題に取り組むことになった。

この文脈の中で教養教育を充実し、入学してきた学生への導入教育と学生への生活指導をかねた「基礎ゼミ」を全学共通必修とし、コミュニケーション技術の教育（情報教育と外国語教育）をシステム化し、同時に就職指導を強化する。いつでも学生の就職相談に応じる「キャリアデザイン・センター」がこの文脈で開設された。これら一連の改

革が、福山市立女子短期大学では、伝統的に続けてきた「卒業研究」を種にして「特色ある大学教育支援プログラム」へ申請することから始まったのである。

四 おわりに

短期大学における「特色ある大学教育支援プログラム」事業は、この三年間の間にどのような刺激を大学や短期大学に与えたか。その成果を問うにはもう少し長い歴史の積み重ねと慎重な検証が必要であろう。しかし、今年採択された取組にみられるように、短期大学教育の流れは、資格や免許にもとづく専門職業人の育成に力点をおき、そのために実習教育を工夫、改善する方向にある。

これらの採択された取組はいずれも、社会的なコミュニケーション力がまったく欠けている学生たちを、二年間の教育でどのようにして、社会ですぐに役立つたくましい職業人に育て上げるか。こうした問題にたいする有効な答えであり工夫であったといえる。

しかしこうした実習教育に力点をおけばおほくほど、短期大学は一つの矛盾に突き当たる。大学教育が本来持たねば

ならないはずのリベラル・アーツ教育の側面が手薄になっていく。最近、大学教育にたいして企業経営者が求める人材は「教養に裏打ちされた人格や異文化の理解力、交渉力」であるといわれる^(注)。

企業はいま資格をもった人材ではなく歴史観や宗教観、あるいは確たる倫理観や社会的責任感を持つ人材を必要としているという。高等教育に本来求められるはずのこうした「教養力」は、四年制大学の課題であって短期大学の課題ではないといえるだろうか。専門的資格を持たないで短期大学を卒業する圧倒的多数の学生は、一般企業に就職していく。教育目標を「賢い家庭人」から「人間力のある職業人」にシフトさせた福山市立女子短期大学は今、この矛盾に突き当たっている。

例えば、保育士の養成を行っている保育科では、採択された取組をモデルにして、実習科目をテコにしたユニークな教育的工夫を実践し始めている。しかし二年間という短い教育期間では、資格教育に工夫をこらせばこらすほど、教養力を高めるといふ大学教育の本筋から離れてしまう恐れがある。ここをどうするか。

一八歳人口の減少と学生の進学動向の変化（四年制大学

志向の増加）に伴って、短期大学教育はますます大きな曲がり角にたっている。短期大学はどのような方向をめざしていくべきか。つまり教養ある家庭人の育成という非専門職業教育を行ってきたこれまでの短期大学の伝統をどのように脱構築するのか。改めてリベラル・アーツ教育の重要性が認識されるなか、短期大学教育における教養教育はどのようなものであったらよいのか。問われるのはこのところである。残念ながら「特色ある大学教育支援プログラム」の短期大学部門で本年度採択された取組には、こうした面での工夫がみられるものはなかった。

(注) 千葉望「企業が求める二一世紀のグリベラル・アーツ」
『カレッジマネジメント』一三四号、Sep. Oct. 二〇〇五、七二ページ